

## 第10回東亜総研月例セミナー講演録

日 時：平成27年1月27日（火）13時30分から15時まで

場 所：東京都千代田区麹町4-1-1 麹町ダイヤモンドビル9階 株式会社レコフ会議室

講 師：前モンゴル駐箚特命全権大使 城所卓雄氏

テーマ：「地政学的見地から見たモンゴル～モンゴルを正しく楽しく理解するために～」

### <講演録>

司会：まず開会にあたりまして、当財団の代表理事会長の武部勤からご挨拶いたします。

武部：皆様におかれましては、本年も変わらぬご支援ご協力をお願い申し上げます。ただ今ご紹介ありましたように、本日の講師に前モンゴル駐箚特命全権大使の城所先生をお迎えすることになりました。私が自民党幹事長時代、サンクトペテルブルクに自民党の若手議員と一緒に参りました際、城所さんはサンクトペテルブルク総領事館の総領事をお勤めでした。その時は、外務省のお役人に対して一つのイメージを持っていましたが、城所総領事にお会いしてそのイメージが変わりました。城所さんは、非常に具体的な外交安全保障政策に関する卓見をお持ちであると同時に、非常に実務的かつ具体的にこれを戦略化し、将来の展望に沿って日本はどのように行動しなければならないか、政治や産業界に対して望むことを具体的にわかりやすく説明いただいたこと大変感激を覚えたことを昨日のここのように思い出します。また、私が自民党幹事長を辞めて日本モンゴル友好促進議員連盟の会長に就任した際、現在のエルベグドルジ大統領の就任式がございました。その時、駐モンゴル大使として我々を案内してくれたのが城所さんでした。そのように、私とはお互いに理解し合える友人としてのお付き合いをさせていただいております。私がモンゴルを初めて訪ねたのは海部総理の時で、日本の総理大臣が初めてモンゴルを訪問した年でした。その当時海部総理の通訳をやっていたのが、本日お越しいただいておりますフレルバータル大使でした。1990年、驚いたことに、ガラス1枚割ることなくモンゴルで革命が起きましたが、その当時、軍の中尉だったのが現在のエルベグドルジ大統領でした。モンゴル軍から改革者とみなされて命を狙われた一方、保守層の代表格がモンゴルの軍隊であるということで民衆からも命を狙われたのがエルベグドルジ大統領でした。私が自民党幹事長時代、人民革命党政権にご招待いただきモンゴルに参りましたが、モンゴルは本当に民主化されたのか、政権交代された政治が本当に行われているのか興味があり、

当時は野党の民主党党首であったエルベグドルジ大統領を訪ねていろいろお話をし、意気投合したことを懐かしく思います。私はエルベグドルジ大統領がノーベル平和賞を受賞すべきだと思い、日本の国会議員 70 名以上の署名をもらって推薦したこともあります。そういった関係もあり、私は大統領から北極星勲章をいただいて、現在は在札幌モンゴル国名誉領事をお引き受けしている次第でございます。

モンゴルという地政学的な国柄をただ見るだけではなく、モンゴル国の魂、民族の歴史、伝統、文化を理解しつつ、「和を以て貴しとなす」という「協和の精神」で今後関係を深めていくことが大事だと思います。そのような考えに基づき、私共東亜総研も活動を続けてきたわけであります。以上を申し上げまして、ご挨拶方々、城所先生のご紹介に代えさせていただきます。本年もどうぞ宜しくお願いいたします。

司会：それでは城所卓雄先生から「地政学的見地から見たモンゴル～モンゴルを正しく楽しく理解するために～」と題してお話を頂きます。城所先生は、外交官として日本の国際戦略の立案や諸外国との外交交渉など国際舞台の第一線で活躍されてきました。特にモンゴルには過去三回赴任され、数多くの外交案件に取り組みされました。モンゴルでは、昨年 11 月 21 日にサイハンビレグ官房長官が新首相に任命された時期にもあたりますので、モンゴルの現状や今後のアジア情勢の行方など、豊富なご経験の中から、楽しくかつ分かりやすいお話をいただけると存じます。城所先生のご経歴はお手元の資料をご参照ください。それでは、城所先生、どうぞよろしく願い申し上げます。

城所氏：皆さん、こんにちは。本日はこのような機会を設けて頂きありがとうございます。本日は、モンゴルをわかりやすく楽しく理解するという趣旨でお話いたします。まずお手元の記事を見ていただきたいのですが、「世界記憶力選手権」というものがありまして、毎回優勝しているのはモンゴルの選手です。日本の選手はあまり出ない、出ても確実に優勝できないということで、日本のマスコミは一切取り上げません。次の記事は、日本でマラソン大会が開催される時、アフリカ出身の選手が強いイメージがありますが、モンゴルの選手も日本の選手より必ず上位にいます。マラソンでも日本はモンゴルに負けているということです。そういう意味で、モンゴルは個人プレーがものすごく上手い国で、柔道も日本がモンゴルに負け始めています。本日は、モンゴルのことが楽しくわかるようなお話をしたいと思います。

私はロシアに通算 4 回で計 10 年間、モンゴルに通算 3 回で計 8 年半、アメリカに通算 3 回で計 7 年間それぞれ勤務したのですが、そこでの経験はやはり外交官たるもの、その国

の情報のみならず、幅広い情報を持っていて、先方と絶えず意見交換できる関係になければいけないと思いました。例えば、私がモンゴル大使であったときは日本の海外青年協力隊（シニアを含む）をモンゴル国の首相にご挨拶させていました。現在はそのようなことは行っていません。4年前の東日本大震災の日（3月11日）にバトホルド首相と青年協力隊とのご挨拶の機会を設定していましたが、それは結局震災の1時間後、ウランバートルで持たれました。世界で最初に外国の元首クラスの人が日本人に対して「大変だったね、何でも支援します」との発言があったのは実はウランバートルでした。我々が外国に出ていくときに特に大事なのが、日本人としてのアイデンティティがなければならないということです。つまり、日本人としての良さがなければなりません。近年は日本の良さが失われつつあるので、日本人のアイデンティティを復活・維持しなければなりません。日本とモンゴルとはいろいろな接点があることに加え、モンゴル人は心を持っているので、モンゴルは日本のことを心から支援してくれます。私とモンゴルとの接点は1964年の東京五輪の時からですが、その2年前にモンゴルは国際オリンピック連盟に加盟したので、モンゴルにとって最初のオリンピックは東京五輪でした。私は大学1年生でしたが、モンゴル選手団を横浜港に出迎えました。1973年にはモンゴルに日本大使館を開設しましたが、当時私は一番若手だったので何から何までやらなければならず、非常に勉強になりました。当時の柘植大使から言われたのは、当時は日本と政治体制が違うので、まずは文化取り極めからやろうということで、私がモンゴル政府との交渉を全部担当しました。1974年、日本大使館とモンゴル外務省との間で文化取り極めが署名されました。これが契機となって、日本とモンゴル間で留学生や教員の相互派遣が始まりました。昨年、文化取り極め締結40周年ということで、いろいろな文化交流イベントが開催されました。また、モンゴルで民主化が始まってから約25年が経っていますが、民主化以後にモンゴルから日本へ留学した人たちは急増し、現在モンゴルで指導者になっています。そういう意味では、文化は5年や10年の話ではなく、留学生が派遣されてから結果的には30年、40年後に役に立ってくるということを理解していただきたいと思います。それから、モンゴルは阪神淡路大震災や東日本大震災の際、緊急援助物資や緊急援助支援隊を非常に早く手配しましたが、日本の報道では、そのような迅速な支援について一切触れていなかったのが残念だと感じました。東日本大震災では、日本円に換算すると3億円、人口比とGDP比から換算すると1,000倍の3,000億円の寄付があったことを理解しなければなりません。公務員の方は給料の1日分、またモンゴル日本議員連盟の方や日本留学経験者は給料の1か月分を義援金として

寄付してくださいました。更に、年金受給者、孤児等の義援金もありました。東日本大震災1年後の2012年に元首クラスが来日した国はモンゴルのバトホルド首相だけでした。このような心の温かい支援やいろいろなサポートがあったということをご理解していただきたいと思います。

次に、「変貌しつつあるモンゴル」についてお話しします。もともとモンゴルは1911年に清朝が崩壊して国の基盤ができましたが、建国100周年のデータを見ると、当時は人口の85%が遊牧、農業人口でしたが、現在それは3割を切り、資源やビジネスといった分野に社会が大きく変わりました。また、当時の貿易高は85~95%が旧ソ連、東欧向けでしたが、民主化を経て中身が変わり、現在は90%が中国向け輸出で、ロシア向け輸出は3~4%です。かつて旧ソ連中心だった貿易が、全て中国と入れ替わったということです。その入れ替わりのきっかけは、1990年の民主化です。具体的に言いますと、ロシアとモンゴルとの銅山に関する合弁契約（合弁比率）を切替え、モンゴルが自由に貿易できることになり、今まで旧ソ連圏に輸出していたものが、次々に中国向けに変わり、輸出量がどんどん増えて、90%前後を維持しているということです。

他方、1911年からモンゴルは主権を確立し、1924年に国家として独立しました。その後70年間、旧ソ連の影響下にありました。その後中国をはじめいろいろな国に外交が広がっていくが、1956年の第20回ソ連共産党大会で、中国と旧ソ連が対立しました。この影響が直接及んだのがモンゴルです。私が1973年に大使館開設と同時に赴任したとき、あらゆるイベントに招待されましたが、パーティーが始まり2~3分すると、モンゴルの政府や党関係者や旧ソ連圏の大使も必ずスピーチの中で中国の悪口を言い始めていたのが印象的です。

それから、モンゴルと日本とを比較すると、残念ながら全てが「逆」です。例えば、内陸国で中国とロシアだけに挟まれているのは、世界でモンゴルしかありません。日本は周りが全て海です。モンゴルは砂漠の国で、日本は平野の国です。モンゴルの輸出品の9割は天然資源、地下資源で、日本の輸入量の9割は地下資源です。つまり、地下資源に関して、モンゴルはほぼ全て輸出し、反対に日本はほぼ全て輸入しているということです。だからこそ、お互いが助け合える、相互依存の関係に持つていける国だと思います。モンゴルで最初の石炭を見つけたのは中国で、1921年にはすでにモンゴルで採掘していました。それ以後は当時の旧ソ連、ドイツ、チェコスロバキアの技術で採掘が進みました。特にチェコスロバキアの技術が大変高く、チェコスロバキアがモンゴルに入ったからモンゴルの

資源が見つかったと言っても過言ではありません。あと、モンゴル人の外国語修得能力は素晴らしいです。3~4ヶ国語を修得するのは当たり前です。日本人が最初に学ぶ英語修得に苦労しているのとは対照的です。また、記憶力も世界ナンバーワンで、テレビの画面に3秒くらい1,000桁以上の数字が出たら全部覚えています。2010年11月にエルベグドルジ大統領が日本の国会でスピーチをされました。このスピーチ案は、モンゴルの外務省が事務的に原稿を作成していましたが、大統領は2日間面会を一切シャットアウトして、原稿をご自身で全部書き直して、国会でのスピーチでは原稿を一回も見ませんでした。モンゴル人にはこういう素晴らしい記憶力があると思います。

次にモンゴルの外交ですが、中国とロシア、南北朝鮮との関係は全てうまくいっています。他方、日本のそれら4か国との関係はギクシャクしています。モンゴルは中国とロシアに挟まれているということで、中国とロシアは「隣国」という非常に大事な国になっています。他方、アメリカは非常に遠すぎるということで、モンゴルの認識として「第三の隣国」という言葉を使用し、結果として中国とロシア以外の国を「第三の隣国」と呼んでいます。モンゴル国としてみれば、中国やロシアとは非常に難しいバランス外交を取らなければなりません。他方で、中国やロシアの「両隣国」と「第三の隣国」間のバランスも考えなければなりません。日本が立候補した国際機関や役員について、世界で唯一サポートしてくれているのがモンゴルです。大事なのは、いつも日本をサポートしてくれたのはモンゴルだけしかいないということです。来年はASEMが発足して20周年、モンゴルがASEMに加盟して10年を迎えますが、ASEMはその節目の年にウランバートルで開催されます。中国やロシアの「両隣国」とのバランスの中で、また「第三の隣国」との関係の中で、モンゴルの外交をアピールする非常に良い時期だろうと思います。過去、モンゴルはAPECのメンバーになれるのではないかという報道がありました。モンゴルは1993年以降、アジアの隣国としてAPECに加盟するのが一つの外交目標であったと思います。それが、昨年の開催地が中国であったのですが、本件が忘れられてしまったようでした。モンゴルの資源の関係で見ると、カナダとオーストリアとイギリスが石炭の採掘などで一番サポートしています。また、貸事務所や食料品などいろいろなビジネスを仕掛けてくるのが韓国です。そして、目立ちすぎる進出をしているのが中国です。見事な衰退をしているのがロシア、良いアピールをしているのが韓国です。他方、モンゴル人の労働力が足りない中で、中国人が約3万人、北朝鮮人が約3千人入っています。それから、車の修理工はほとんどがベトナム人、町のレストランの従業員はほとんどがフィリピン人です。日本の観光は昨

年ようやく 1,300 万人を超えたと言われていますが、モンゴルは人口 300 万人に対して、昨年の観光客は約 50 万人でした。つまり、観光客の人口比率でいうと、日本よりもモンゴルのほうがはるかに多いのです。また、モンゴルは年の半分しか観光シーズンがないため、観光の受入技術はモンゴルのほうが上だと思います。ウランバートルでは東京と違い、週末でも 24 時間必ずドル紙幣を換金してくれます。また、モンゴルのレストランに行く时必须英語表記がありますが、日本のレストランでは半分以上英語が入っていません。私は、観光を受け入れるレベルとしては日本よりもモンゴルの方が上だと感じています。

昨年のモンゴルでの 10 大ニュースを見ると、第 1 位はエボラ出血熱、第 2 位はクリミア問題でした。日本ではクリミア問題は第 5 位でした。なぜかという、それはロシアの影響をヒシヒシと感じるからでしょう。70 年前に国連ができた際、原加盟国が 51 か国ありました。国連の加盟要件として、我々は独立国であることと習ってきました。しかし、よく調べてみると、51 の加盟国の中に独立国でない国が 5 か国含まれていました。イギリスが推したであろうインド、アメリカが推したであろうフィリピン、フランスが推したであろうシリア、そして旧ソ連のスターリンが推したであろうウクライナとベラルーシです。改めて国連憲章を調べてみると、国連加盟国の要件としてどこにも独立国の規定が書いていません。当時、旧ソ連の指導者のほとんどがウクライナ系で、ウクライナの産業の特性もあって、当時の旧ソ連としては絶対切り離しにくいというのが、国連の加盟国に推薦した理由であり、だからこそ、今もってロシアが手放すことができないのだろーと思ひます。

日本とモンゴルに関して、政府関係では非常に良い関係にあります、日本企業の出方が若干遅くなっていると思ひます。1990 年代にモンゴルが民主化し日本企業が進出し、ODA も始まりました。私も ODA 関連の出張で何度も現場に行きましたが、日本企業は大体その場で意思決定してました。それが数年経つと、「検討します」と言ひて日本に持ち帰ることが多くなり、日本企業の意思決定スピードは遅くなつてしまいました。他方、モンゴル側のほうでも法律が次々と改正され、日本企業にとって迅速な判断が難しくなりました。中国、ロシアの反応も早いので、今後は、意思決定のスピードを早める必要があると思ひます。ありがとうございました。

司会：せっかくの機会ですから、ご質問などがありましたら、ぜひどうぞ。

会場 1：モンゴル人は遊牧民ということで、自然や動物に対する思いや人に対する優しさなどがあると思ひます。日本ではオリンピック・パラリンピックが間近に迫っていますが、観光バリアフリーに関して、モンゴルでは障害をお持ちの方や盲導犬・聴導犬を使ひてい

の方がどのくらいいらっしゃるのか、またそれに対して観光の部分における整備がきちんとされているのかどうか。日本ではトイレの案内に英語が全然使われていないなど、未だに整備が遅れており、このままで本当にパラリンピックが開催できるのか不安になります。このことについて、どのようにお考えでしょうか。

城所氏：日本では学校でいじめがあります。いじめが起こるのは、今あまりに生活が便利になりすぎてきて、やるものがなくなってしまったからです。一方モンゴルの学校では、いじめがありません。モンゴルの唯一の欠点は草原にはトイレがないことですが、最近はかなり改善されてきています。観光面でモンゴルにはいろいろなルートがあり、道もよくなって行きやすくなりました。温泉もあり、食事にも相当気を遣っています。パレエの水準は日本よりもモンゴルのほうが高いです。ただ、それを冬の一番寒いシーズンだけではなく、観光シーズンの夏にいっぱいやってくれたほうが、日本の観光客も見やすいと思っています。

会場2：日本とモンゴルとの経済協力についてお伺いします。モンゴルの地下資源は大変な状況です。例えば、アメリカ、ヨーロッパ、カナダ、オーストラリア全てがモンゴルの地下資源の開発に参画しています。日本はなぜここに参入しないのかと思います。モンゴルと良好な関係を維持するためには、政府・財界が一緒になって外交・経済政策をやらないとアジアの平和はないのではないかと思います。そのためには、日本政府はモンゴルとの経済協力を力を入れるべきなのが21世紀ではないかと思います。今後、日本とモンゴルとの経済協力についてどのようにすればよいのか、お聞きしたいと思います。

城所氏：資源の関係では、英国、オーストラリア、カナダが最前線にいます。また、石炭を現場で掘削する技術を教えているのはオーストラリアとインドネシアであり、日本でないことを残念に思います。もっと日本側が真面目に取り組むべきではないかと思います。基本的なインフラ整備は20年、30年後に成果が出る話ですが、そのような支援は迅速にすべきだと思います。日本・モンゴル間の政府レベルの関係は良いが、一歩下がったところの個別の案件が今動いていませんので、もっとやっていただきたいと思います。また、日本企業がモンゴルに行く場合は、現場の調査を十分にしていけるべきで、行く前に結論が出るような情報を持っていけば、意思決定のスピードが速くなると思います。

司会：ありがとうございました。それでは、閉会のご挨拶をモンゴル国特命全権大使 ソドブジャムツ・フレルバートル閣下から頂戴したいと存じます。

大使：城所前大使、大変面白くて勉強になるお話をありがとうございました。私達モンゴ

ル人も、自分たちのことでわからないことがいっぱいあります。今のモンゴルを見ると、戦い、競争だらけの国で、大変です。私のほうから見ると、モンゴルは自分で自分を探している最中であると思います。どういう国になってしまったのかという認識が不十分です。その議論、競争、戦いを通じて自分を見つける、自分を見つけたら将来を歩く道が見えてくる、こういう段階にある国だと思っています。日本でモンゴルに対する興味、関心が年々増えているのは大変良いことです。少しずつモンゴルのことを理解し、相互理解が深まれば、両国間の信頼関係が生まれてきます。そういう意味では、東亜総研がモンゴルについていろいろな問題を取り上げるセミナーを主催してくださったのは大変ありがたいことです。東亜総研の皆様、特に武部先生に御礼を申し上げたいと思います。本日は、大変面白いセミナーに招待していただきありがとうございました。最後に、皆様の今後の益々のご発展をお祈り申し上げます。本日はありがとうございました。

司会：以上をもちまして月例セミナーを終了させていただきます。本日はありがとうございました。

(了)